

ヨハネの福音書

神の子なるイエス

ヨハネの福音書の強調点はイエスの神性であり、イエスの説教と対話とからなり、イエスの行ったわざよりも、語った事柄を記している。シャフは、この福音書を「これまで作られた最も重要な文書」と言った。

著者

著者は本書の終り（21：20, 24）に至るまでは自分のことを明らかにしていない。彼は自分を「イエスが愛された弟子」（13：23, 20：2）、イエスと個人的に最も親しかった友、使徒ヨハネであると述べている。近代批評が起るまでは、古代伝承もその後の正統的見解も、ヨハネが著者であることを認めている。イエスの処女降誕、神性、肉体の復活などを否定する批評家は、「長老ヨハネ」についての古い仮説に基づいて、著者は使徒ヨハネではなく、エペソにいた他のヨハネであったと飛躍した。もちろんイエスの神性に対する証言としての本書の価値の根底を危うくするこの説は、薄弱な証拠と、本書の信用を落そうという見え透いた願望に基づいているので、キリスト者が真剣に考慮する価値はない。これは現代のある派の「学者」の得意な宣伝の1つにすぎない。

ヨハネ

父の名はゼベダイで（マタ 4：21）、母はサロメといったようである（マタ 27：56, マコ 15：40）。これをヨハ 19：25 と比較すると、イエスの母マリヤの姉妹であったと思われる。もしそうなら、ヨハネはイエスの第一のいとこであり、年齢もほぼ同じで、幼少の頃からイエスを知っていたに違いない。

ヨハネは若干の財産を持つ事業家であった。彼は「雇人」を使用するほどの漁業を営む5人の仲間の1人であった（マコ 1：16-20）。カペナウムでの漁業のほか、彼はエルサレムに家があり（ヨハ 19：27）、大祭司とは知り合いであった（ヨハ 18：15-16）。

彼はバプテスマのヨハネの弟子であった（ヨハ 1：35, 40）。彼がイエスのいとこであったならば、バプテスマのヨハネとも親戚関係にあったはずである（ルカ 1：36）。そしてヨハネとイエスに関する御使いの告知を知っていたに違いない（ルカ 1：17, 32）。ゆえにバプテスマのヨハネがヨルダン川岸に現れて、天国が近づいたと叫んだ時、ゼベダイの子ヨハネはすぐバプテスマのヨハネと行動を共にしたのである。バプテスマのヨハネの証しによって彼はイエスの直弟子（ヨハ 1：35-51）、最初の5人の弟子の1人となり、イエスに従ってガリラヤに帰った（ヨハ 2：2, 11）。それから漁業に戻ったらしい。多分1年後くらいに、家業を捨ててイエスと行動を共にするように召された。以後彼は常にイエスと共におり、福音書記事の目撃者の1人であった。

イエスは彼に「雷の子」（マコ：17）というあだ名を付けた。これは彼が激しく、荒い気質であったことを暗示するようである。しかし彼はこの気質を抑制した。見知らぬ者がキリストの御名によって悪霊を追い出すのを禁じたこと（マコ 9：38）、火をサマリヤ人の上に呼び下そうと願ったこと（ルカ 9：54）は彼の性格への興味ある傍証である。

彼は3人の内弟子の1人で、イエスに最も近い弟子と認められていた。5度も「イエスが愛された弟子」と言われている（ヨハ 13：23, 19：26・20：2, 21：7, 20）。これほどイエスを引き付けたのは、

彼がすばらしい性格の持主であったからに相違ない。

彼とペテロとは、全く氣質を異にしていたのに、十二弟子中屈指の指導者となり、たいていは一緒にいた（ヨハ 20：2，使 3・1，11・4：13，8：14）。

何年間もエルサレムが彼の主な滞在地となった。確かな伝承によれば、彼は晩年をエペソで過した。その間の彼の活動や所在については何も知られていない。エペソにあって彼は長寿を保ち、福音書、3 書簡、黙示録を記した。

著作年代は普通、後 90 年頃とされている。ある人は、ヨハネはその福音書をイエスの復活後間もなく、初めヘブル語で記し、後に注を加えて、ギリシャ語で「エペソ版」を出版した、現存写本はすべてそれから出ている、と述べている。

聖書図書刊行会 ヘンリーH. ハーレイ 「聖書ハンドブック」より